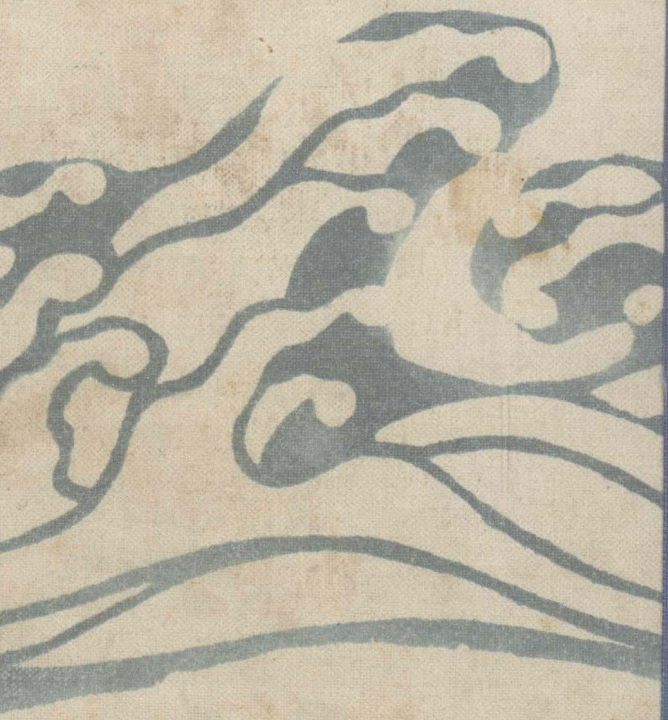

目次

西郷隆盛

財団法人日本科学協会

海音寺潮五郎全集　第十一巻
西郷隆盛
全二十一巻・第六回配本
九〇〇円

昭和四十五年三月二十日発行
著者　海音寺潮五郎
装幀　芹澤銈介
口絵　中尾　進
発行者　大田信男
印刷所　凸版印刷

発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

西
郷
隆
盛

昭和三十六年十月二十二日—三十八年三月二十日「朝日新聞」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

上野の銅像

「身ぎれいにしていなければいけないよ。洋服にはちゃんとブラシをかけなさい。毎日下着をかえなさい。日に三度は顔と手をシャボンで洗うがよいね。不精ひげなぞ最もいけませんよ。武士のたしなみの一つだよ。人は先ずその外貌によって判断されるのだ。身だしなみが悪いということは緒戦において敗れることであるばかりでなく、人を不愉快にする」

家に来る若い編集者や知合いの青年に、ぼくは時々こんな忠告をこころみる。

「先生が（あるいはおじさんが）そんなことを言うとは案外だな」

と、はじめのうち、青年たちは大いに笑うのだ。

「案外とはなんだ。おれを蛮カラだとでも思っているのか」

と、ぼくも大いに笑って、さらにお説教をこころみる。

「戦争中たいへんはやった『葉がくれ』の中に、武士は身だしなみに気をつけなければいけない、いつも紅をたずさえていて、顔色の悪い時などは薄くはくべきものだ、青いしおたれた顔色をしていてはいけないからだとある。男は死んでも桜色ということわざも昔はあったものだ。常に凜乎たる風貌をしていなければならないと、昔の武士は考えていたわけだが、現代だってそれは同じだろうじゃないか」

それから発展して、こんなことを言ったこともある。

「佐久間象山という人を知っているだろう。あの人は信州松代藩（真田家）の武士で儒者としても相当なものだったが、最も見識ある洋学者として、維新時代に鳴らした。勝海舟や吉田松陰や、新島襄とともに京都の同志社をはじめた山本覚馬など、象山の門弟だ。この象山がおそろしくお洒落でね。

『大丈夫たるものは常に堂々たる威容がなければならない』

といって、松代藩で家禄百石の武士であったにかかわらず、いつも殿様のような服装をしていた。体格もよかったが、顔立ちもりっぱでね。長めの顔で、眼光けいけいとしている。おまけにあごひげを生やしている。それが立派な服装をしているので、貫禄十分だ。初対面のものは威圧されて正視出来ないくらいだったそうだよ。そうそう、自宅ではいつも虎の皮のしきものをしいていたという。虎の皮はちょいとこまるが、当時としては相当効果ある演出だったろうよ。

この虎の皮について、おもしろい話がある。吉田松陰がはじめて象山を訪問した時だ。松陰は相手が天下に高名な象山先生だと思うから、座敷の入口に近いところにすわっ

てあいさつした。

『そこは遠うござる。ずっとお進み下され』

と、象山は虎の皮のしきものを指さしてすすめたが、松陰は遠慮してなかなか進まない。

すると象山は言ったというのだ。

『それは皮でござる。食いつきはいたさん』

松陰ほどの人でも、象山には先ず威圧されたのだね」

象山のお洒落は肩が張りすぎているきらいがあって、いささかいや味がないこともないが、容貌、風采のりっぱであることは、女にとってはいうまでもなく、男にとっても有利なことであるには相違ない。

豊臣秀吉ほどの人でも、あの容貌の醜悪、貧弱さはその素姓とともに、彼の生涯の劣等感となっている。今日伝わる秀吉の肖像画はやせた顔や手足に不釣合いに大きく張った肩と胴をしているが、あれは竹で編んだ籠をからだにはめこんで衣冠して、画家に描かしたのである。いかに彼が自らの体格と容貌の貧弱、醜悪さにひけめを感じていたかがわかるのである。

彼が常に大を心掛け、大言壮語し、陽気、豪快にふるまい、気前よく散じたのは、この劣等感を圧倒して上に出ようとの苦しい闘いであったといえよう。彼には才のそれにともなうものがあったので、禍いを転じて福となし、あれだけの功業をなすことが出来たのだが、本人にとっては愉快なことではなかったに相違ない。

伊達政宗もまた幼時疱瘡の毒が目に入って片目となったのであるが、醜怪な容貌であることに生涯劣等感を持ちつづけた人だ。彼は豪快にして豪放、若いころは好んで異風な服装をした人と伝えられているが、これもその劣等感との闘いであったとぼくは解釈している。証拠がある。

政宗の肖像は仙台市内の瑞鳳寺と松島の瑞巌寺との両方にあるが、死後すぐ出来たのは瑞鳳寺の方である。死に臨んで彼は、

「身体髪膚は父母のたまものである。生れもつかない不具になるなど、不孝しごくなことである。されば、わしの肖像などつくることどもあらば、五体完備のものにいたすよう」

と遺言した。瑞鳳寺の肖像はこの遺言によってこしらえられたので、両眼ぱっちりとあいているのである。

瑞巌寺のは、死後十七年たって、

「時代のたつうちには真のお姿が忘れられてしまう」

とて、ありのままにつくり、秘像として寺内の奥深く安置して、一般には見せず、明治になってやっと公開することになったので、明治初年に東北に旅行して瑞鳳寺の像だけ見た安井息軒などは、その旅行記に「伊達政宗が片目だったというのはうそではなかろうか」と書いているほどである。

トルストイも、幼年時代から青年時代に至るまで、その容貌の醜さをひどく恥じ、性格的にもゆがんで来たことの

なげきを書いている。

秀吉といい、政宗といい、トルストイといい、いずれも一個の英雄男児であるが、それでもこうだ。容貌を気にするのは女だけではないのである。

この点、西郷隆盛は最もめぐまれている。彼の体格の雄偉さ、容貌の立派さは、最も英雄的であり、最も男性的であり、今日ではだれ知らないものはないが、その生前にも人々の目を最もひくものであったようである。

中岡慎太郎——四十以上の人には説明の必要ないほど知られている人物だが、若い読者のために簡単に説明する。

坂本竜馬が海援隊を組織したとならんで陸援隊を組織し、坂本とともに薩長連合をまとめ上げ、坂本とともに幕府側の刺客に暗殺された土佐藩士だ。竜馬のような天才的なはなやかさはないが、緻密な頭脳と組織的な才能ははるかにまさっていたのではないかと思われる人物だ。この中岡が慶応元年の歳末、当時の天下の人物を素描批評し、天下の落ちつく先きを論じて、郷里の同志に送っているが、その文章のトップに西郷をあげ、

「洛西（ここでは京都以西の意）第一の英雄にござ候」

と結論しているが、その書き出しは、

「人となり、肥大にして後免の要石にもおとらず、古の安倍貞任などはかくのごとき者かと思ひやられ候」

というのだ。

後免は土佐の地名だ。高知市の東方十二、三キロにある。要石は角力とりの名前だ。安倍貞任は腰囲七尺四寸あったと伝えられている。

このように、先ず西郷の体格から人物論に入っているのである。

いかに西郷の巨大な体格と英雄的な相貌の印象が強かったかがわかるのである。

それでは、西郷の体格は数字的にはどうであったかと言えば、身長五尺九寸余、体重が西南戦争ごろ二十九貫余あったそうである。西郷のフロックコートが鹿児島の南洲神社にあるが、それを数年前二、三年にわたって柔道の日本選手権の保持者であった吉松七段が着てみたところ、ほんの少し胸が窮屈であったが、ほぼぴったりであったという。大体において吉松七段のからだつきと思えばよいわけである。

顔立ちはどうであったかといえば、写真は一葉ものこっていない。うつしたことがなかったという。現在流布されている南洲の肖像画は、その最初のものは、明治初年に印刷局のお雇技師であったイタリー人キョソネが、生前の西郷を知っている人々から聞き集めてモンタージュして描いたのだという。フロック姿で、ちょいと顔を横に向けた肖像画、あれである。西洋人の描いたものだけに、どこかに西洋人くさいところのある相貌になっている。

明治初年の作品であるから、生前の西郷を知った人がまだ多数いた。

「似とらんぞ。口もとのところが違うな」
「顔も少し長目にすぎるようじゃ」
などと批評が多かった。
そこで、薩摩出身の洋画家床次正精（とこなみまさよし）——画家としては全然名をなさなかったが、大正年代の政治家竹二郎の実父だ——が、キョソネの作をもとにして、西郷の友人や門下生や西郷の家族らに指摘させてはモンタージュして行って、最も真に近いといわれるものをつくり出した。これは胸のあきようが燕尾服姿である。西郷が燕尾服を着用したことがあるとは聞いたことがないが、そうである。
以上の話はもっぱら肖像画の方だが、彫像は上野公園山王台の銅像が最初だ。
ぼくは、この文章を書くにあたって、一応見てくる必要があると思って、さしえを顧う中尾進さんをさそって、一緒に出かけた。
八月十三日、日曜日、薄曇りしていたが、おそろしく暑い日であった。朝の十時ごろついた。
山王台入口の石段の下、石段の中途、上の台地、いずれもずいぶんにぎわっている。ほとんど全部が若いアベックで、大へん楽しげだ。外出ぎらいで、たまに出ても、用事の家に真直ぐ行って真直ぐにかえって来るだけのぼくには、全部がアベックというこんな情景ははじめて見るものだ。
（なるほど、日本は変ったわい）
と、ぼくは少なからず感心したが、普通からすればこの感心は少し滑稽かも知れない。
三々五々、散らばっている人々は皆普通のみなりだ。けばけばしい人は一人もいない。最も庶民的な人々ばかりだ。つつましく日曜を楽しんでいる若い夫婦であり、恋人達であるように見えた。
西郷の銅像は昔のままの姿で犬をひいて、ほこりにまみれた町にむかって、のっそりと立っていた。そこに集まっている人々にはまるで無関心に、遠いところに目をはなってもの思いにふけっているように見えたが、人々もまた無関心だ。その前の柵によって立っている人々も数人あったが、一人として銅像を見ている人はない。そこに銅像のあることすら気づかず、ましてこの銅像の人が日本歴史の上に大きな足跡をのこした人であることも、およそ一世紀前に、灰燼となるべき運命にあったこの東京をすくった人であることも、まるで関心はないようであった。
戦前には、何かのまじないのためか、単なる遊戯のためか、この銅像に紙をかみくだいて吹きつけるいたずらをする人が多く、どこもかしこも白くよごれていたものだが、それは今ではない。きれいにつるつる光っている。
ぼくは銅像の前の柵によって、銅像を仰ぎ、しばらく見ていた。
（西郷どんは憂鬱そうだな）
と思った。人が多数集まってにぎやかな中にあって沈黙

している人は憂鬱げに見えるものだから、そのせいだったのかも知れないが、銅像の目はひとみにあたる部分をまるく彫りくぼめてある。それが遠く一点を凝視して、物思いをひそめているように見えた。

音を立てて鳩がとんで来て、頭にとまろうとして、すべってとまれず、肩にとまったが、すぐまた一羽とんで来て、相手を翼ではたはたとたたいた。

「つまらないわ、そんなとこ。あちらに行きましょうよ」

と言っているように見えたが、すぐつれ立ってとび去った。これもアベックだ。とび立つ時、糞をした。それが肩から胸にかけて白く筋を引いてよごした。

台石には銅板がはめこまれ、漢文でなにやら書いてある。読もうとして視線をこらしていると、うしろの方で何やら言う声が聞こえる。ふりかえると二十二、三の青年がしきりに手をふっている。わきによってくれと言うのである。

青年は片手にカメラを持っており、ぼくのわきにはその恋人であろう、最も普通な顔と最も普通な姿の若い娘さんが、うつされる人のポーズをとって、柵によりかかって立っていた。

(じゃまになるからどいてくれ)

と、青年はぼくに要求しているわけであった。

ぼくはわきに寄って、二人をながめていた。二人ともまだひどく若い。

(この恋人達は当分結婚出来ないだろうな。あと四、五年は恋人同士でいなければなるまいな。あきが来ず、めでたく結ばれてくれればよいがな)

と、ぼくは思った。

それにしても、若い人々にとって、今では西郷さんは恋人の写真のバックとしか考えられていないらしいと、多少の感慨があった。

もっとも、この話をあとで朝日新聞の学芸部長の扇谷正造氏にしたら、

「それは違いますよ。きっとそのアベックは日曜を利用して地方から出て来た人達だったのでしょう。東北地方の者にとって、西郷の銅像は東京の象徴ですからね。あの銅像がバックにあるということは、東京に行って東京でうつしたという証明になるのですよ」

と言った。

そうかも知れない。扇谷氏は宮城県の出身である。ものごとはいろいろな人に広く聞いてみなければわからないものだと思った。

恋人達の撮影がすんだようであるから、ぼくはまた柵に近づいて、銅板の文章を見た。

西郷隆盛君の偉功は人の耳目にあり。また賛述を須ひず。前年勅して特に正三位を追贈せらる。天恩優渥、衆感激せざるなし。故吉井友実、同志と謀り、銅像を鋳て、以

て追慕の情を表はさんとす。朝旨して金を賜はり費をたすけたまふ。資を捐ててこの挙を賛する者二万五千余人。明治二十六年工をおこし、三十年に至りて竣る。すなはちこれを上野山王台に建て、事由を記して後に伝ふ。

というのだ。

ぼくがそれを読んでいると、ガス会社か電燈会社の集金人といった風体の、首に小さいカバンをかけた中年の人と、中学生くらいの少年が両わきに立って、同じように碑文を凝視しはじめた。

「読めないや。漢字ばかりだ」

と、少年は言った。

ぼくは中尾さんから画用紙をもらい、鉛筆を貸してもらって、写しはじめた。すると、中年の人は手帳を出して、小さい鉛筆をなめなめ、自分も写しはじめた。

この文章にある吉井友実は歌人吉井勇の祖父である。若いころからの西郷の親友の一人で、同じ志を抱いてはたらいて来た人である。友実は二十四年四月に死んでいるから、着工も見ることができなかったのである。

文中の「前年」とあるのは、明治二十二年二月十一日、旧紀元節、明治憲法の発布された日だ。この日西郷は明治天皇によって賊名をのぞかれ、維新の際の功績によって正三位を追贈されたのである。

西南戦争をおこして明治政府に反抗したため、西郷は逆賊とされ、維新第一の功臣としての名誉をうばわれたのであるが、明治天皇は西郷を追慕されることが深く、政治上のことで政府から意見を申上げると、

「そのことについては、西郷が昔言ったことがあるが、そうは言わなかったよ」

と、しばしば仰せられたという。

また、天皇は酒がお好きで、毎夜のお晩酌が一升におよばれたというが、酔われると、必ず西郷の思い出話をなさった。その思い出話のなかで、最もしばしばなさったのは、明治五年の夏、天皇が軍艦で西国各地においでになり、ついに鹿児島まで行かれた時のことであった。

西郷はこの行幸にずっとお供したのであるが、鹿児島は自分の郷里なので、前もってとくに使いを出して、港に木材で桟橋を設け、ご上陸に便利なようにしておくように言い送っておいたところ、どうした手違いか、それがしてなかった。

「西郷がおこってのう。むっとした顔になった。ともかくも、はしけに乗りこんだ。そのはしけの中に西瓜が入れてあった。暑い時なので、馳走ぶりに入れてくれていたのだろうが、西郷はそれを手許に引きよせると、げんこつでぐわッとたたきわった。顔から胸にしずくがとび散ったのだが、西郷はそれを拭きもせんで、手づかみでむしゃむしゃ食べた。西郷のおこった顔は、わしは、あの時より見ていないが、こわい顔であったよ。しかし、おかしかったな

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

あ」

と、こんな工合にお話しになったというが、いくらおもしろい話でも、毎夜のことだから、大ていあきあきする。しかし、そんな顔をするわけには行かない。つつしんでおもしろそうな顔をして拝聴していなければならない。苦しさは一層だ。皆あぐねた。

しかし、賊名を除かれて贈位されることが決定されると、ぴたりと思い出話をなさることをおやめになったというのである。西郷のことを常にお心にかけられ、政府の要人らにそのお心を気づかせようと意図されたのであろう。

天皇にとって、西郷は最もなつかしい人物だったのである。

明治三年、政府は郷里に引っこんでいた西郷に政府参加をもとめ、翌年から西郷は木戸孝允とともに参議となり、政府の最高首脳になったが、参議として彼が最も力を入れたのは、軍制改革と宮中改革であった。

これまで宮中では天皇の側近には女官が多く侍し、政治上にも女官の力はなかなか強いものがあった。権力者の側近にいる婦人の権力が強くなるのは、宮中と府中（政府）の別が厳格でないところでは、いつの時代でも、どこの国でも同じなのであるが、日本の宮中では特別な原因があった。戦国時代、京都の公家さん達は京都にいては食えないので、地方の大名を頼って都おちするのが多かったし、京にいる者も装束がととのわなかったりなぞで出仕しないことが多く、そのため、朝廷の事務は多く女官らのしごとになった。

政務といっても、朝廷自身が無力になっている時代だから、大したものがある道理はなかったが、それでもわずかにのこるご料地からの租税の受取りや、地方武人の位官の任叙の辞令や、地方大名に金品をねだる書状やらを書いて出すしごとはある。女官らはこれらの仕事をし、その書状を女房奉書といった。天皇の旨を受けて書くのだから勅書と同じ力があった。

女官らがこうしたしごとをする習慣が出来たのは、それより方法がなかったからであるが、ものごとはすべて一旦ついた習慣は条件がかわって来ても、なかなかなくならないものだ。太平の時代となり、公家さん達も京にかえり、朝廷に出仕するようになったのだが、女官らの権力は依然として強く、女房奉書もまた発せられた。

もっとも、江戸時代には幕府の権力が強かったから、女房奉書が幕府の統制を乱すようなことはほとんどなかったが、明治維新は王政復古——天皇権の回復ということをスローガンとして達成されたのだ。天皇権はおそろしく強大なものになった。この強大な天皇権をかさに着ての女房奉書などを乱発されては、新政府の統制は四分五裂となる。建武中興の失敗の有力な原因の一つに女官による内奏のあることは、太平記を読んだことのある者なら誰でも知っているが、明治の初年にもそういう事実があったらしいので

ある。西郷の憂えたところはここであった。

西郷は女官らの階級を改めて任じなおし、その任務の分限を明らかにし、女官らが政治上のことについて裏口からくちばしを入れることが出来ないようにした。女房奉書など言うまでもない。

同時に、これまで天皇の側近に侍する者は堂上の出でなければならないことになっていたのを、武士階級からも採用する制度に改めた。すなわち、宮内大丞には、吉井友実、侍従には村田新八、山岡鉄太郎、島義勇、高島鞆之助、米田虎雄等の人々だ。

吉井友実は西郷の少年時からの親友で、終始ともに国事に奔走した人。村田新八は薩藩士で後に西南戦争で西郷に殉じて死んだ人。山岡鉄舟は説明の必要はあるまい。島義勇は佐賀藩士、後に江藤新平とともに佐賀の乱をおこして死んだ。高島鞆之助は薩藩士で、西郷の門下生で、後の陸軍中将子爵。米田虎雄は肥後藩の老臣の家の生れで、明治の初年、藩の権大参事となった人である。

以上の人々は山岡鉄舟や島義勇をもってもわかるように、硬骨で、誠実で、豪傑肌合の人達ばかりである。西郷は天皇を英雄・豪傑にしたてまつろうと考えたのである。世界の大勢から見て、英雄的君主でなければ日本は立ち行かないと見たからであろう。

天皇は明治四年にやっと数え年二十だ。蛤御門の戦いは天皇の十三の時であったが、砲声におどろいて気絶された と伝える。天資は英邁であられたに違いないが、柔弱な公家さん達と女官衆の中で生い立たれたためこうだったのであろう。

「これでは列強たがいに覇をきそう弱肉強食の今の世界で、日本の天子様としてはこまる」

と、西郷は考えたに相違ない。

伝えるところはないが、西郷は豪傑連にたいして、自分の意図を説き、豪傑連もまた大いに共鳴したにちがいない。

山岡鉄舟がよく天皇のご所望に応じて角力のお相手をしたが、決して負けて上げることをせず、何べんでもお負かし申上げたという有名な話がある。この間の消息を語るものといえよう。

鉄舟は身長六尺二寸、体重二十八貫余あったという上に、剣道で鍛練しぬいた人だ。赤子の手をねじるようであったろうから、相当かげんしてお投げしたこととは思うが、天皇にとってはずいぶんおくやしいことであったに相違ない。

鉄舟にかぎらず、西郷が見こんでえらんだほどの連中ばかりだから、日常の会話も、誠実さと英気の横溢したものであったろう。

天皇の方でも、これまでとまるで違うこの雰囲気には大いに新鮮感があり、お気に召していたらしい趣きが、このころ西郷が国元の叔父椎原与三次にあてて出した手紙に出

ている。

「士族からお召出しになった侍従はとりわけご寵愛で、実におさかんなことであります。奥御殿へお出でになることは至ってお嫌いで、いつも朝から晩まで表御殿にいらせられ、和・漢・洋の学問にお励みで、侍従達と会読を遊ばされることもあり、ご寸暇なくご修業におつとめであります。服装なども従来の大名などよりははるかにご質素で、修業に勉励のご様子は中流階級の子弟などより格別まさっておられます。三条公や岩倉公も、これまでのみかど方とはよほどにご日常がかわっておいでであると申しておられます。元来おん気質は英邁、おからだはご壮健なお生れつきで、こんなみかどは近来はおいでなかったと、公家さん方が申しております」

西郷の帝王学が大いに効果を発揮して、天皇の英邁な天資がめきめきとかがやきを増してきたことがわかるのである。

これについて、作家の杉森久英さんに聞いたことを思い出す。数年前杉森さんが宮崎白蓮さんに聞いたという話だ。

白蓮さんのご生家は堂上華族の柳原家で、大正天皇のご生母はこの家の出身で、天皇家とはとくべつ深い関係があったのだが、白蓮さんのお母さまが、明治天皇のお若い時のことを追想してこう言われたというのだ。

「お馬に召したり、調練を遊ばしたり、角力を遊ばしたり、武張ったことばかり遊ばすので、皆様が、天子様はお祭りを遊ばすのがほんとのおつとめなのだから、あんなことをなさってはいけないのにと、眉をひそめていたのですよ」

古代の天皇は巫(みこ)的なものであり、祭司の長であったというのは、今の歴史家の通説だ。この話は堂上の間にはそのことがずっと近世まで伝承されていたことを物語っているが、それ以外に明治天皇がいかにその時代にふさわしい帝王たらんとしてつとめられたかを、最も雄弁に物語るのである。

晩年、明治天皇はよく女官らに、

「わしは若い時鍛練している。普通の者とはからだの出来が違う」

とご自慢なさったというが、それはこのころのことを仰せられたのであろう。

さて、以上のような次第であるから、天皇が豪傑侍従らにとりかこまれて日夜に修業におつとめであった時期は、天皇にとっては「アルト・ハイデルベルヒ」ともいうべき時期であったろう。必ずや非常ななつかしさを感じておられたろうし、従ってそういう雰囲気をつくって差上げた西郷を、その意味でだけでもなつかしく思っておられたに相違ないのである。

西郷に叛心のなかったことは、天皇はよくおわかりだ。それどころか、最も誠実で、最も忠誠で、最も国を憂え、

最も民を愛する念の深い彼であったことを信じておられたろう。その彼が乱に突入し、敵味方いく万の兵を戦死させ、民の非常なわずらいとなり、賊名を負うて横死しなければならなかった運命の不可思議と惨烈にたいして、深い憐愍と名状出来ないご憂心のあったろうことは、十分に推察がつく。

しかし、絶対権力者である天皇としては、ご自分の口からお言い出しになることは、かえっておひかえにならなければならない。賞罰の大権がご私情によって発動することになるからだ。

「悟れよかし」

との思いをこめて、酒興に託して毎夜思い出話をなさったお気持はまことによくわかるのである。

とにかくも、こうして西郷の賊名がのぞかれ、位階を追贈されたので、銅像建設のことが持ち上り、えらばれた彫刻家は高村光雲であった。

光雲は当時四十一歳、美術学校教授であり帝室技芸員であり、一流の彫刻家であったが、元来は仏師であり、木彫家だ。銅像の原型を制作するにも、今の彫刻家のように石膏ではやれない。こつこつと木に彫んでこしらえたのである。

この原型は銅像の出来上った後、鹿児島市がもらって、鹿児島市内の西郷と、彼に殉じて西南戦争で死んだ薩軍将士との墓のある浄光明寺にすえた。少年のころ、ぼくも見たことがあるが、木像のことだから、上に屋根をしつらえ、まわりに金網を張ってあった。青銅色に塗って、見たところは全然銅像と同じであった。おしいことに、こんどの戦災で焼けてしまった。

光雲は江戸職人の名ごりを濃厚に伝えている人だから、大体においてその手法は写実であるが、写実そのままではない。キョソネの肖像画にもとづきながらも、大いに彼の主観を盛った。

裾みじかの筒袖の着物にへこ帯、小脇差と薩摩式の兎ワナを帯にはさみ、足なか草履をはき、犬をひいた狩猟姿にしたのが、まずそれだ。顔もキョソネのままではない。あのいかめしさがなくなり、率直・磊落・悠揚としてせまらない感じになっている。最も質素で、最も庶民的でありながら、名利を雲煙の脚下に見る高士の風貌がある。西洋人臭さがなくなっていることは言うまでもない。

参議院議員（昭和四十四年末後記——法務大臣）の西郷吉之助さんは隆盛の嫡孫だが、この銅像の除幕式の時にあったという逸話をぼくに聞かせてくれたことがある。

除幕式があるというので、当時まだ鹿児島にいた隆盛未亡人線子は参列するために隆盛の遺児達をつれて東京に出て来た。

式の当日、西郷家の人々は、隆盛の弟である侯爵従道をはじめとして、遺族席に列なっていたが、ひもが引かれ、銅像がぬっと出て来ると、線子夫人はおぼえず嘆声をあげ

た。

「アラヨウ！　宿ンしはこげんお人じゃなかったこてエ！（あれまあ！　うちの人はこんな人ではなかったのに！）」

すると、隣にいた従道が夫人の足をふんで、

「シッ！」

とたしなめた。

その夜、従道の邸で、一族の者が集まった時、従道はこう言って訓戒したという。

「あの銅像は、故人の遺徳をしたって、世間の人々が金を出し合ってつくって下さったものでごわすから、西郷家の者がかれこれ文句がましいことを言うてはなりもさん。ようごわすな」

この話をして、吉之助さんはこうつけ加えた。

「祖母は終生、上野の銅像が気に入りませんでね。〝お祖父さまはごく礼儀正しかお人で、相手が人夫のような人であっても、おごったり高ぶったりしなさることはなかった。いつも鄭重なことばづかいでございもした。まして、あげんぶざまななりで人様の前に出なさることはございもさんじゃった〟と、おりにふれては、わたしらに言ったんですよ。あれは狩りにおじゃる時の姿なんだからと、言い聞かせても、〝そいでも、あげん姿を皆様の見なさるところに立てて〟と、きかんのですよ。きっと、紋付にはかまか、あるいは軍服でも着せて、大いに男ぶりをつくり立ててやりたかったのでしょうよ。女ですからね。ハハ、ハハ、ハハ」

吉之助さんの言う通りだ。世の細君という細君は皆同じだ。ご亭主が人前に出る時には大いに貫禄をつけてやりたいのである。夫人の不服は無理はないのである。

しかしながら、芸術作品として見る時、あの銅像は光雲の傑作の一つたるを失わないと、ぼくは考えている。

実際の西郷の姿がどうであったろうと、庶民の心にある西郷はあの形で具象化するよりほかはなかったろうと思うからだ。その庶民の心に定着しているものが最も的確に西郷の真髄を貫いているとぼくは見ている。

西郷は終生庶民の心を失わなかった人だ。それは追いおい語って行くことになると思うが、ここで一つだけ書いておこう。

西郷が征韓論にやぶれて国に帰っている時、鹿児島市から五里ばかりの帖佐（ちょうさ）という村で百姓一揆がおこった。県庁では鎮撫の評議をしていると、ふらりと西郷が県庁にあらわれた。当時の県令は大山綱良だ。若いころには格之助といって、西郷とともに国事に奔走したなかまだ。

百姓一揆は明治初年のはやりであった。至るところに一揆がおこっている。

一体、革命政府というものは常に理想の実現に性急で、観念論に偏する政策を立て、これを強行しがちなものだが、明治の維新政府もそうであった。やれ廃仏棄釈じゃ、

やれ税制の改革じゃ、やれ入会地の公収じゃと、長い時代の習慣を無視して、性急な政策を強行した。だから、百姓一揆が頻発した。

これらの中には徴兵のことを血税ということばで表現してあったのでほんとに生血をしぼるものと誤解したり、政府が西洋人の種取り用にするために少女を捕えるという流言を信じたり、賤民廃止の布告が出ると、それではわれわれと賤民との間に別がなくなる、賤民は賤民として置いておけと要求したり、無智が原因になっているものもあることはあるが、大部分は昔からのしきたりを無視して入会地を公収してしまった上に、税制を改めて過重な税を課せられた怒りが原因になっている。

若い読者のために説明するが、入会地というのは部落の共有地である。農民らはそこから家畜の飼料を刈り、燃料や堆肥の原料を採取し、住宅の建築や改築用の資材を伐り出したのである。

こういう土地があったればこそ、農民は自給自足が可能であったのに、政府は国有財産や皇室財産をふやす功をあせって、あらかたこれを公収してしまったのだ。現代の富士山麓の米軍演習地をめぐっての問題も、元来あの地があの地方の農民らの入会地であったという由緒があるからのことだ。

こうして共有地を奪われたばかりか、重税を課せられると来ては、農民の生活のなり立つ道理がない。

税率を高くしたことは、新しく新時代の国家として踏み出した日本である以上、いろいろ金もかかるのだから、やむを得ないことではあったが、それを急いではいけないのであった。

説得し、納得させる、という段取りが必要であったのに、治者は命令しさえすればよい、従わさせるためには権力がある、というのが、政府首脳部から末端に至るまでの官僚どもの意識だったのだ。

さて、西郷が県庁についた時、大山綱良はおも立った役人を集めて、一揆のとりしずめについて会議をひらいていたが、中座して、西郷を迎えた。

「格之助サア、帖佐に百姓一揆がおこったと聞きもしたが、ほんとでごわすか」

「ほんとでごわす。そのことで、今相談しとるところでごわすが、まことにこまったことでごわす」

「ご心配じゃろうな。ところで、どう処置なさるつもりでごわすか？」

「それは相談できめるつもりでごわすが……」

「どうじゃろ、格之助サア、わしにそのとりしずめ役をさせて下さらんか」

大山はおどろいた。

「おはんが？」

「はい。まかせて下さるなら、行かせてもらいもす」

大山は西郷がこの事件を重大視していることがわかっ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.